

社会調査実習報告書『名古屋の観光まちづくり』刊行によせて

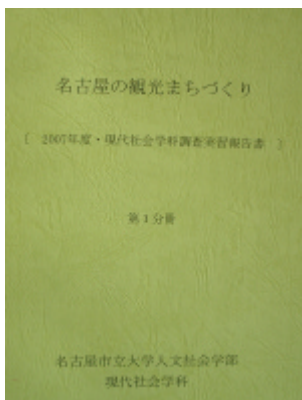
社会調査実習で観光をとりあげて2年目になる。昨年度の報告書にも書いたが、観光をテーマにするのは、法人化した本大学の地域連携の一環である。総合科目「名古屋の観光」を開講し、その準備のために研究プロジェクトを立ち上げた。その成果を昨年3月に『名古屋の歴史・文化・まちづくりと観光』という報告書として刊行し、講義テキストとしても活用している。

研究プロジェクトの世話役や講義のコーディネーターを務めていることもあり、調査実習でも観光をとりあげることにした。昨年度は8人のメンバーが集まり、はじめてのテーマに苦勞しながら『名古屋の観光を勘考する』という報告書を期限内に刊行できた。今年度も「名古屋の観光まちづくり」というテーマで参加を募り、10人のメンバーにより調査がスタートした。

「観光まちづくり」は提唱者の西村幸夫東京大学教授によると、地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力のあるまちを実現するための活動である。観光とまちづくりを相互に連携させる地域主体の取り組みであり、従来型の観光地づくりや観光施策とは一線を画すものだ。研究プロジェクトや調査実習の成果をもとに、今年度は主に「観光まちづくり」という切り口から「名古屋の観光を勘考する」ことにした。

調査経過に記されているように、ヒアリングからアンケート調査、地点調査へと進んでいった。アンケート調査は夏の猛暑のなかの「メーグルアンケート」と「外部アンケート」である。広域的に若い人を対象にした「外部アンケート」は、名古屋市が全国規模で実施した調査とも照合して、なかなか興味深い分析結果が得られた。「地点調査」は途中から加わった調査で、どこを対象にするかで何度も議論を重ねた。結局「観光まちづくり」という視点から、覚王山と熱田をとりあげることにした。覚王山は商店街調査でとりあげたことがあり、私にとっても馴染みの地域である。熱田も「観光まちづくり」の課題をさぐるうえで参考になる地域であった。

こうして今回も期限内に報告書を完成でき、担当者として喜びに耐えない。くどいほど報告書の「賞味期限」と調査の「社会的責任」を力説してきたので、大所帯ながら当初の「約束」をしっかりと守ってくれた10人の調査メンバーの奮闘努力に感謝したい。



写真は2008年4月3日に届いた完成した報告書と学部棟前に咲く桜

(上記は報告書の編集後記に掲載した原稿)